

Consumption of Information and communication technologies in domestic spaces

Shingo Dobashi

Faculty of Environmental and Information studies
Musashi Institute of Technology

3-3-1 Ushikubo-Nishi, Tsuzuki-ku, Yokohama, Kanagawa 224-0015 JAPAN
dobashi@yc.musashi-tech.ac.jp

Abstract

Since the emergence of new information and communication technologies (ICTs) based on digital technique, the domestic information environment is now rapidly changing. However, we have not acquired even the rough understanding of the reality of new ICTs in Japanese households and the design of information tools for households is still immature. With these points in mind, this paper examines the process of the cultural integration of new ICTs into domestic spaces through the findings of ethnographic surveys conducted in 2002-2003. In addition, we also examine how the design process of domestic information technologies should be by regarding the domestic users as potential designers of their own information environments.

Keywords

domestic space, information and communication technology, domestication, moral economy

家庭空間における情報テクノロジーの消費

土橋 臣吾

武蔵工業大学環境情報学部

要旨

近年のデジタル情報化の流れのなかで、家庭の情報環境のあり方が大きく変わりつつある。しかし、家庭の情報環境の実態を実証的に捉える試みは未だ数少なく、家庭の情報テクノロジーや情報ツールのデザインも、技術的な可能性を恣意的に家庭空間に結びつけたものであることが多い。本稿では、こうした問題意識から2002年から2003年にかけて実施された、家庭の情報環境の実態に関するエスノグラフィックな調査の知見を確認することで、家庭の情報環境の構築プロセスを幾つかの事例に基づいて検討する。その上で、家庭空間における情報テクノロジーの消費者を情報環境の潜在的な「デザイナー」として位置づけ、家庭におけるテクノロジーのデザインのあり方について検討を加えていく。

キーワード

家庭空間、情報テクノロジー、ドメスティケーション、モラル・エコノミー

1. はじめに

デジタル技術を核とする新たな情報テクノロジーの登場以降、日本における情報化は新たな段階に入ったといえる。特に、90年代後半以降のいわゆる「家庭の情報化」の進展はめざましく、インターネットの商用化、Windows95の発売、森首相による「IT元年」の宣言といった幾つかの出来事を契機に、パーソナル・コンピュータやインターネットの家庭内利用は急速に拡大した。また、当初は若年層を中心に広がった携帯電話も今では中高年層あるいは小中学生にまで浸透しつつあり、携帯電話を若者文化としてだけでなく、家庭の文化や家族コミュニケーションとの関連で考えるべき状況も現れつつある。もちろん、未だかなりの格差をはらんではいないが、日本の多くの家庭においてこれらの新しいメディアの利用はすでに日常生活の重要な一部となっており、長らく「マスメディア+固定電話」を基本形としてきた家庭の情報環境は大きく変容しつつある。

だが、こうした事態の進展にもかかわらず、日本の家庭における新たな情報環境の実態を捉える試みは未だ十分になされていない。家庭という場で新たな情報テクノロジーがいかに活用されるのか。人々は新たな情報テクノロジーにどのような意味を見出すのか。こうした、基本的な問いも現状では未だ開かれたままであり、経験的研究の蓄積が待たれているのである。もちろん、家庭における「情報行動」の計量的把握であればこれまでも数多くなされている。しかしながら、質問紙調査という方法の制約上、それらの調査が把握する「情報行動」はそれがなされる具体的な場の文脈から切り離されており、新たな情報テクノロジーをめぐる個々の家庭空間で具体的に何が生じているのかまでを記述するものではない。それは家庭という場のリアリティからはかなり距離のあるところで把握される何かを示すにとどまり、家庭の情報環境の実態を明らかにするものではない。

こうした問題意識から、本稿では、家庭における情報テクノロジーの受容状況に関するインタビュー調査の知見に依拠しながら、デジタル情報化以降の家庭の情報環境のあり方をより具体的に検討することを試みる。調査はエスノグラフィックな手法を用いたものであり、その結果からは、パーソナル・コンピュータやインターネットといった新たな情報テクノロジーをめぐる情報環境のあり方を個々の家庭の実態に即して見ることができる。だが、調査結果の検討に入る前に、次節ではまず、情報テクノロジーと家庭空間の関係をいかに捉えるか、その理論的な枠組みを検討することで議論の見通しを確保しておきたい。その上で、第三節では具体的な調査の知見を参照しつつ、家庭の情報環境がどのようなプロセスを経て、いかなるものとして構築されていくのかを幾つかの事例に即して素描し、最終節となる第四節で、家庭の情報環境のあり方についてデザインという視点からさらに考察していく。

2. テクノロジーのドメスティケーション

家庭空間とテクノロジーの関係を考えるときにまず参照すべき議論として、R・シルバーストーンを中心とした共同研究に端を発する「家庭空間におけるテクノロジーの消費」をめぐる議論をあげることができる(Silverstone, et.al, 1992)。このプロジェクトは、総じて言えば、カルチュラル・スタディーズ、あるいは文化社会学的な発想とテクノロジー研究が会っていった場であったといえるが、参加者はそれぞれに社会学、人類学、歴史学など異なる出自をもっている。そして、そうした多様な参加者のあいだでゆるやかに共有されているのが、テクノロジーのドメスティケーション(domestication)という視座であり、プロジェクトの成果論文集の刊行以降、その後の研究潮流に大きな影響を与えるに至っている(注1)。

では、そこで言われるドメスティケーションとはいったい何であろうか。やや日本語にしにくい概念ではあるが、あえて訳すならば「家庭内化」ということになろう。また、ドメスティケーションには「野性の飼いならし」という意味もあり、つまりここでは、新たなテクノロジーが家庭へ導入されるときに、そのむきだしの技術を家庭空間に適合するように馴致していく人々の実践というものが想定されている。シルバーストーンらが言うように、新たな情報テクノロジーはまずはパブリックな領域で開発・生産され、そこで特定の意味と機能を担うべき存在として定義される。だが、それは必ずしもそのままの形で家庭に編入されるとは限らない。家庭という独自のロジックをもつ空間においては、情報テクノロジーもまた、その場の文脈に適合するような形へと再構成される。そこにはテクノロジーを使用する側の能動的な実践があり、パブリックな領域で生産されたテクノロジーはこのプロセスを通じて、家庭というプライベートな領域に適合するような形へと使用者=消費者によって意味づけ/位置づけなおされていくのである。

こうした議論は、シルバーストーン自身も十分警戒しているにもかかわらず、結果としてある種の社会決定論に近づくという難点も抱えている。それは「野性」としてのテクノロジーが家庭空間に適應させられていくプロセスを捉えつつも、逆に人々の日常生活のあり方が新たなテクノロジーによって組織化されていくプロセスをうまく捉えられないのである。この点については、筆者もすでに検討したように(小林・土橋・佐幸、2002)、「社会的なもの」としての家庭空間と「技術的なもの」としての情報テクノロジーをあらかじめ異なるカテゴリーに属するものとする発想を超えて、両者が不可分な統合体、すなわち社会-技術的な統合体を形成していくプロセスを記述する視座が獲得されねばならない(注2)。しかしながら、そうした修正を受けねばならないとしても、シルバーストーンらの議論は、以下の二点において、家庭の情報環境を考えていく上できわめて重要な意義をもつといえる。

まず確認しておきたいのは、ドメスティケーションという視座によって、家庭の情報環境の構築において使用者が果たす役割をはじめて正当に評価できるようになるという点である。というのも、私たちは「家庭の情報化」というとき、しばしばそれを新たなテクノロジーの開発によって自動的に進展する何かとして捉えてしまう。新奇なテクノロジーを家庭空間に順次配備しさえすれば、「家庭の情報化」は自動的に進展すると想定してしまうのである。だがシルバーストーンも強調するように、家庭空間とは単なる物理的空間ではなく、様々な規範や価値観、家族のジェンダー的な権力関係など、きわめて複雑な文脈が錯綜する社会的空間である。そこでは新たなテクノロジーも常にこうした文脈のなかへ巻き込まれていくのである。だとすれば、家庭の情報環境とは住居というハコに各種の情報テクノロジーを置いただけで完成するものではない。それは、家庭空間の複雑な力学のなかで、情報テクノロジーとその使用者とが複雑なネゴシエーションを繰り返していった結果として生じる何かとして理解されねばならないのである。テクノロジーのドメスティケーションという発想の重要性はまずこの点において確認されるべきであろう。

これと密接に関わることとしてさらに指摘できるのは、家庭空間の文脈へ注意を払うことで、テクノロジーを特定の情報行動を支援する「道具」としてだけでなく、日々の生活環境における「象徴的物体 (symbolic object)」として捉える視座が開かれる点である。日常的な感覚からも明らかのように、家庭における情報テクノロジーはその機能性とは別の次元で様々な象徴的意味を持つ。たとえばごく単純なところで、情報機器の外観のデザインは、家庭という生活環境においてはしばしば重要な意味を持ち、それは個々の家庭の美的な価値観に関わっている。また、情報機器を家のどこに設置するかという問題も実際の生活場面においては重要な問題であり、たとえば居間に置かれるテレビが「家族の団欒」を媒介する文化的装置であったのに対し、個室に置かれるテレビは全く逆の意味を持つ。こうした情報テクノロジーの象徴的次元は、いわゆる情報行動論のなかではほとんど捨象されてきた。だが、少なくとも情報環境である以前に生活環境である家庭空間においてそれは決定的に重要であり、使用者によるテクノロジーの意味づけ/位置づけに照準するドメスティケーションという視角はこうした論点をも射程に入れるのである。

いうまでもなく、以上のように確認されるシルバーストーンらの議論の有効性を実証研究に活かしていくには、家庭の情報環境のあり方をミクロな次元で詳細に捉える試みが必要になる。彼らの研究プロジェクトも実際に取り組んだように、家庭という場におけるエスノグラフィックな調査が求められるのである。次節で検討を加えるのは、まさにこうした観点から、調査協力者の家庭を実際に訪問してなされた調査の知見であり、日本においてはほとんど前例のないものである

といえる。主要な関心は新たな情報テクノロジーの家庭における利用・受容状況を調査協力者の生活環境に即して捉えることであり、パーソナル・コンピュータ、インターネット、携帯電話など近年のいわゆるデジタル情報化の趨勢を念頭に置いている。調査は2002年4月に開始され、横浜市都筑区・青葉区、東京都渋谷区を中心に約40世帯へのインタビューを完了し、現在も継続中である(注3)。本稿で主な資料として依拠するのは、各家庭におけるパーソナル・コンピュータの設置状況の写真であり、コンピュータを中心とする各家庭の情報環境のあり方を視覚的に把握しながら、それを幾つかのパターンに区分しながら検討していくこととする。

3. コンピュータをめぐる家庭の情報環境のパターン

ごく当然のことではあるが、コンピュータという情報テクノロジーの利用の仕方は各家庭でそれぞれに異なる。それはコンピュータの利用歴によっても異なるし、どのような経緯で導入したか、家族のなかで誰が使うかによっても大きく異なる。本調査で得られたひとつの重要な知見は、コンピュータという機器の物理的な配置の仕方が、そうした違いを相当程度反映するという点である。逆に言えば、それぞれの家庭でコンピュータがいかなる存在として受容されているかは、機器の配置の仕方に端的に現れるのであり、その意味で、以下で見ていくコンピュータの設置状況の写真は家庭の情報環境のあり方を読み解いていく上で、きわめて重要な情報を提供するものといえる。

では、コンピュータは家庭のどこに、どのような形で設置されているのだろうか。幾つかのパターンがあるが、おそらくその意味を最も理解しやすいのは、図1に見られるような「個室に置かれるコンピュータ」の姿であろう。

図1の家庭では、コンピュータを利用するのは六十代の父親と社会人の娘であり、コンピュータはそれぞれの専用機をひとつの部屋にまとめる形で設置されている。父親へのインタビューによれば、現在は退職しているものの、コンピュータの利用は玩具のデザインに使っていたころの「仕事の延長線上で」行われるものであり、コンピュータを使うときはあらかじめまとめた時間を用意し、長いときで半日程度続けて作業に集中するという。また、インターネットの利用も含めて、コンピュータは「何か目的があるときに使う」ものであり、明確な目的がないままにコンピュータに向かうことはないし、気散じた状況での「ネットサーフィン」などをすることもない。

こうした利用形態あるいは利用への意識から窺えるように、コンピュータを個室に設置する利用者の多くは、コンピュータの利用を日常生活の他の活動、あるいは他の家族との関わりからある程度切り離されたものとして捉えていることが多い。「個室」という空間はその物理的な表現であるといえよう。その意味でこう

した「個室のコンピュータ」による情報環境とは基本的に一人で何かに専念するための環境であり、端的に「作業環境」であるといつて良い。実際に図1のインフォマントの場合も、部屋自体はもう一人のコンピュータ利用者である娘と共有されているが、日中に利用する父親と夜間に利用する娘とで暗黙の内に時間的な棲み分けがなされており、二人が同時に使うことはない。

いうまでもなく、コンピュータは今日のように家庭に普及する前は、もっぱらオフィスで用いられる仕事上の道具であり、そうした職場での利用経験を持つ者にとっては、家庭のコンピュータをそのアナロジーで理解することはきわめて自然なことであろう。同様の事例を示した図2は、「個室に置かれるコンピュータ」のより典型的なイメージであるといえる。60代女性のコンピュータ設置状況であるが、実際に、写真にあるこの個室で、家族経営の会社の経理業務を長らく担当していた彼女の情報環境は、ほぼ完全に「オフィス」として理解可能なものである。

現在ではボランティアでしている電子点訳の作業に使われることの多い彼女のコンピュータは、一見して分かるように様々な作業用の資料、辞書・辞典の類、各種記録媒体などに囲まれ、かなりの作業スペースを確保する専用のデスクに設置されている。こうした事務機器あるいは作業道具としてのコンピュータのあり方はやはり「オフィス」を家庭に組み込んだものであり、コンピュータの当初の姿を踏襲した、ある意味で「伝統的」なものだといえる。実際に、図1、図2共に10年以上のコンピュータ歴を持つ利用者の情報環境であり、いわゆるコンピュータ・リテラシーも高い水準にある。もちろん、同じような情報環境を構築している場合でも、利用歴の浅い利用者である場合もある。しかしながら、今回の調査では、こうした「個室」の情報環境をもつ人は、「子供部屋」での若年層を除けば、例外なく家庭における最初のコンピュータ採用者であり、コンピュータを個人専用の道具として考えることが、あらかじめの前提になっている。

これに対して、次に見ていく事例はその対極にある。図3は、40代の夫婦と二人の子供からなる核家族世帯のコンピュータ設置状況である。当初は会社支給のノートパソコンをしばしば家に持ち帰っていた夫が「家で気軽に使えるように」購入したコンピュータは、初めから家族共用のものとしてリビング・ルームに設置された。実際に家族全員に利用されているこのコンピュータは、語られる通りまさに「気楽に」使われている。つまり、夫は仕事目的で利用するものの、それは帰宅後にメールの確認をする必要がある場合などに限られ、ウェブの利用などは全て会社で済ませる。また、妻はコンスタントに利用するものの、一日一時間程度の利用であり、小学生と中学生の子供たちは学校の宿題があるときのみ必要に応じて使うという状況である。つまり、長時間に渡って高度な集中を要する作業はむしろ例外的であり、現状ではリビングという共有スペースでコンピュータを使うことに大きな支障は感じられ



図1 個室に置かれるコンピュータ



図2 個室に置かれるコンピュータ



図3 リビング・ルームに置かれるコンピュータ

ていないのである。

限られたサンプルから判断することはもちろんできないが、今回の調査で最も頻繁に観察されたのは、こうした「リビングで共有されるコンピュータ」の姿である。そもそもは、まさにパーソナルなツールとして開発されたパソコンが、こうした形で利用されるのは意外にも思えるが、コンピュータの利用層が成人男性から女性や子供にまで広がった現在では、家族の中に複数の利用者がいる状況はむしろ一般的であり、一台のコンピュータを共用する家庭はさらに増えていくとも考えられる。こうした状況においては、コンピュータやインターネットは図1や図2の家庭において見られたような仕事用・作業用のツールとしてではなく、むしろ家電に近づいているといえるだろう。

重要なのは、コンピュータをめぐる情報環境が家族の共有スペースに構築される場合には、そこに家族関係のあり方や家庭の価値観といったものがより密接に関わってくるという点である。たとえば図3の家庭でのインタビューで語られたように、コンピュータをリビングに設置するにあたっては、「子供を個室にとじこもらせないようにする」という両親の意図もあったのであり、そこには親子関係を密なものとして維持しようとする意識が、家庭の情報環境のあり方に直接関わっていることを見て取れる。こうした親子関係への配慮は他の家族においても見られたし、容易に推察されるように、それはコンピュータだけでなく、テレビや携帯電話との関わりにおいてもしばしば語られた。さらに、図3の家庭では、コンピュータのモノとしてのデザインにも相当の関心が払われており、場所をとらない液晶であることや、機器の色などが購入のポイントになったという。生活環境としての家庭の中心であるリビング・ルームにおいては、コンピュータもそうした美的な感覚のなかで評価され、そこに違和をもたらない形で埋め込まれていく必要があったのである。

正確さに欠ける表現をあえて用いるなら、こうした「リビングのコンピュータ」は「個室のコンピュータ」に比べて、より強くドメスティケートされている。それはたとえば図3の家庭で妻が語った「ながらパソコン」

に象徴されるように、家庭の中での他の活動（たとえば家事をしながら）や他の家族の存在（たとえば隣でテレビを見ている子供）との連続的な繋がりの中にあり、家族関係や家庭の日常生活の時間的・空間的構造のなかにより深く埋め込まれていくのである。そして、そうしたなかでのコンピュータは、「個室のパソコン」に比べて多義的な意味を持つことになる。つまり、ある時にはそれは仕事の道具であり、ある時には検索マシンであり、ある時には子供の勉強道具になる。そして、別の家庭で母親が語ったように、テレビや携帯電話が子どもたちの個室にすでに入り込んだ状況において、リビング・ルームに置かれるコンピュータに「家族をつなぐ」役割が期待されていくこともありうるのである。

さて、以上に見てきた幾つかの事例は、いずれもコンピュータの家庭への導入以来、その設置状況が大きくは変わっていないケースである。しかしながら、場合によってはもちろんコンピュータの置かれる場所は変わりうる。そして、きわめて重要なことに、そうしたコンピュータの再配置は、機器の設置場所の物理的移動であると同時に、家族のあり方や、家族のなかでの個人の役割などを再配置していくプロセスでもある。たとえば、図4はその典型的な事例である。一見したところ、図3と類似した状況に置かれたこのコンピュータは、しかし実際には妻のみが利用する個人専用のコンピュータである（これとは別に子供が専用で使うコンピュータが子供の個室にある）。しかも、このコンピュータは当初は個室に置かれていた。にもかかわらず、彼女のコンピュータは個人専用のまま個室を出て家族の共有スペースに設置しなおされたのである。

こうした経緯の背景にあるのが、家族の中でのジェンダー的な不均衡である。インターネットの趣味的な利用を中心に、彼女はほぼ一日二時間程度コンピュータを利用するが、それは夫にとっては必ずしも望ましいことではない。つまり、彼女のコンピュータ利用はしばしば夫に「オタク」と揶揄され、「ずっとやっている」と怒られる」ものだった。もちろんそれは、男女が逆の場合でも起こりうることであり、個室で長時間コ



図4 リビング・ルームに置かれるコンピュータ



図5 キッチン付近に置かれるコンピュータ

ンピュータを利用する夫に不満を抱く妻という例もよく見られる。しかしながら、些末なことに見えるが重要な含意をもつ事実として、彼女は個室でコンピュータを利用していた時期に、しばしば夫から様々な「用事」を頼まれることで、コンピュータの利用を中断し、リビングやキッチンへ出て来ざるを得なかった。つまり、家事の主要な担い手であることを期待される主婦としての彼女にとっては、男性がしばしば当然のこととしてする「個室での継続的な専念」は困難なことであり、だからこそ、個人専用のコンピュータをあえて「主人のいる近く」であるリビング・ルームに置き、自らに期待される主婦役割とコンピュータ利用とのあいだの矛盾を空間的に解消していったわけである。

同様の事例は他の家庭でも見られる。たとえば、図5はやはり当初は個室に置かれていたコンピュータがキッチン近くに設置し直された例であり、この場合もコンピュータは主婦である女性の専用機である。

やや異なることとして、図5の家庭においては、妻のコンピュータ利用に関して夫の存在が何かしらの具体的な障害になったわけではない。しかし、地域のボランティア活動との関連で様々な書類の作成やメールのやり取りをかなりの時間を割いて行なうなかで、彼女は個室でコンピュータを利用することに多少の困難を感じていた。それは端的に言って「家事との両立」の難しさであり、その意味において図4の事例と共通している。インタビューの記録によれば、個室で利用していた頃には、彼女にとってコンピュータとは「やるときは、もうどんと座って」使うものだったが、それを家の建て替えと同時にキッチン付近に移動することで、「夕飯の支度なんかしながら、あ、ちょっとメール見かなって感じ」で使われるものへと変わっていった。それはより日常的なものへと変化したのである。

こうした事例以外にも、多くの主婦が自分の時間が家事や育児との関連で「細切れ」にならざるを得ないことを語ったが、そうした「細切れ」の時間のなかでも機能しうる情報環境を準備するには、コンピュータをそれ以外の活動がなされる場へ移動し、家事や育児の日常的なルーティーンのなかへ組み込むことが必要だったということになる。また、それでもなお、一定の時間その前に座ることを要求するコンピュータは、主婦にとってはしばしば使いにくいものであり、何人かの主婦に見られたように、コンピュータの利用から離れて、メールのやり取りなどを中心に、従来コンピュータでしていた活動の一部を携帯電話へと切り替えていく場合もある（注4）。そして、繰り返すならば、家族の要求を受けてそうするのであれ、自発的にそうするのであれ、そこには家庭の情報環境が主婦というジェンダー的な役割との関係で構築されていくプロセスを明確に見て取れるのである。

さて、以上いくつかの典型的な事例に即して、コンピュータを中心とした家庭の情報環境のパターンを概観してきた。もちろん、家庭の情報環境のすべてが本節で見えてきたパターンのいずれかに該当するわけでは

ないし、より細部に照準して捉えるなら、ほとんど無限の多様性を持ちうる家庭の情報環境を分類学的に整理し尽くすことは不可能かつ無意味であろう。にもかかわらず、本節で幾つかの「パターン」として家庭の情報環境を捉えてきたのはなぜだろうか。この点については、調査の方法との関連で付記しておくべきだろう。端的に言えば、それはインタビューのプロセスにおいて、他ならぬインフォマント自身が自らの情報環境の構築プロセスをひとつの「物語」として語り得たという事実があるからである。もちろん、それはおそらくインタビューに先だって明確に意識されていたわけではないが、インフォマントの多くは、インタビューの中で、自らの情報環境をある程度明確な筋道の下で構築された何かとして捉え得たのである。

その意味で、本節で抽出した「物語」はインフォマントと筆者の共同作業のなかで獲得された現実の解釈であり、現実そのものではない。だが一方で、個々の「物語」を駆動するロジックには、彼ら彼女らがコンピュータという新たな情報テクノロジーを家庭空間においてどのような存在として意味づけ/位置づけていこうとしたか、その使用者の論理が端的に現れていたといえる。それは現実そのものではありえないにせよ、おそらくは普段明確に意識されることのない微細な使用者の実践を可視化するのである。だとすれば、I.アングが「解釈的エスノグラフィ」と呼ぶこうした手法は（Ang, I., 1996=2001）、多義的で、曖昧で、アモルフな日常生活における「使用者の実践」を捉えるための、完全ではないがひとつの有効な方法だといえる。では、本節で描いてきたような「使用者の実践」の存在を想定するとき、私たちは今後の家庭の情報環境のあり方、あるいはそのデザインのあり方について、どのような含意を得ることができるのであろうか。最終節となる次節では、この点について敷衍しながら、家庭における情報テクノロジーや情報ツールの参加デザインの可能性について検討していく。

4. 考察：デザイナーとしての使用者と参加デザイン

解釈として提示した調査結果にさらに解釈を加えることが許されるならば、家庭空間における情報テクノロジーの使用者は、使用者であると同時にそのテクノロジーが埋め込まれた情報環境の「デザイナー」だといえる。もちろん個々のインフォマントの意識に即してみれば、彼ら彼女らが自らを「デザイナー」として意識しているとは考えにくい。だが、そうだとすると、それぞれの家庭での情報テクノロジーの受容プロセスを見る限り、情報テクノロジーの使用者である彼ら彼女らが、自らの情報環境のあり方に対して何かしら構築的な役割を果たしていたことにほとんど疑いの余地はない。だとすれば、日常の生活環境のなかで情報テクノロジーを使いこなす人々は、その時点で既に自らの情報環境を「デザイン」しているのだと考えることも不可能なことではない。

このように考えることで、情報テクノロジーあるいは情報ツールのデザイン実践は重要な含意を得ることができる。まず最も基本的なこととして確認すべきは、使用者の「デザイン」が暗黙の内に追求するものの中には、機器の機能性・利便性には還元できない別の何かが含まれているという点である。前節で見てきた、「リビング・ルームのコンピュータ」や「ジェンダー的に構築される情報環境」の事例が示すように、家庭の情報環境は必ずしもコンピュータの道具としての能力を全面的に発揮させるための環境として構築されていたわけではない。それはむしろ、既存の生活空間のあり方、さらには既存の家族関係のあり方とコンピュータとの矛盾を含んだ関係を調停しようとする環境として構築されていたのである。だとすれば、そこには確かに、テクノロジーを技術的な機能性だけでなく、その社会的意味において評価していくような意味のエコノミーがあったといえるだろう。家庭空間におけるコンピュータは、そうした意味の体系に埋め込まれることで初めて、家庭において有意義な存在となりえたのである。

再びシルバーストーンに依拠するとすれば、彼はそうした意味のエコノミーを家庭のモラル・エコノミーという言い方で表現している。

それゆえ、家庭のモラル・エコノミーとは意味の経済であり、意味に満ちた経済である。そして、その両方の次元で、家庭のモラル・エコノミーはパブリックで客観的な商品と意味の交換に対して、潜在的あるいは現実的に、それを変容させていくような関係に位置付く。(Silverstone et.al, 1992:18)

家庭空間を宛て先とする新たなテクノロジーやツールのデザインに際しては、こうした家庭のモラル・エコノミーを十分に考慮する必要がある。だが、家庭の情報化をめぐる幾つかのデザイン実践を見る限り、こうした視点は未だほとんど考慮されていないように思われる。もちろん、わずかな例外として、ここ数年のコンピュータのプロダクト・デザインなどに、家庭あるいは家族の文化への目配りといったものを見て取ることができる。だが、それにしても現状では萌芽的な段階にとどまっているし、家庭の情報環境のデザイン実践として、近年さかんに喧伝されている「情報化住宅」や「スマート・ホーム」などの開発事例を見れば、そのデザインを導くロジックは、家庭のモラル・エコノミーといった発想とはほぼ無縁の領域に展開しているように見える。

たとえば、その代表的な事例として、経済産業省の国家プロジェクトの一部として展示された「情報家電モデルハウス」を見てみれば、そのデザインは市場ニーズというよりもむしろ技術シーズ主導でなされていることがわかる(注5)。そこには、たとえば「インターネット洗濯機」から「リモートコントロール散水・給餌システム」に至るまでの、その必要性からして疑

問符のつく新奇なツールが家庭空間を埋め尽くすかたちで配備されている。いうまでもなく、そこには本稿の冒頭で述べたような、家庭空間を物理的なハコとして捉える視線があり、このハコを細分化した上で、様々な情報ツールをそこに順次配備していく形で家庭生活を合理化していこうとする意図が読みとれる。そして、個々のツールはその用途をあらかじめ厳密に定義する形でデザインされており、それ以外の用途や、そのツールの意味を再解釈する余地はほとんど与えられていない。したがって、それは使われるとすれば、そのデザイナーの意図が貫徹するような利用以外にあり得ないようなツールであり、その意味できわめて可塑性の低いものとなっている。

もちろんこれはある意味で極端な事例である。だが、一方でそれは必ずしも例外的な事例ではない。日本における家庭の情報化の歴史を振り返ってみれば、私たちはすでに80年代に、いわゆるニューメディアの大きな失敗を経験している。そして、当時そのニューメディアの代表格として期待されたビデオ・テックスシステムなどは、まさに家庭における「情報行動の合理化」のみに特化したツールであり、そうであるがゆえに、それは必ずしも合理性のみを追求するわけではない家庭の情報環境に浸透しえなかったのである。上で見た「情報家電モデルハウス」は「今すぐ手に入る未来」なるスローガンを掲げている。だが、80年代のニューメディアもまさにそうであったように、技術的に可能な未来が、社会的にも即座に可能だとは限らないのである。

そして、今回のシンポジウムの主題である参加デザインという発想と方法は、家庭の情報化をめぐるデザイン実践のこうした欠落を埋めていくための、ひとつの有効な道筋を示すものだといえるだろう。本論文集の他の論考が示すように、参加デザインは仕事場あるいは地域といった文脈ではすでに相当の広がりを見せている。だが、家庭という文脈での参加デザインの事例は数少なく、家庭の情報環境のデザインは政策的実践によるものか、あるいは企業によって商品として開発される個々のプロダクト・デザインに依存している状況である。しかしながら、本稿で示してきたように、家庭における情報テクノロジーの利用者は、常に潜在的な「デザイナー」でもあり、デザインの専門家とそうした人々の協働は十分可能であるように思われる。そして、それはこれまでエンド・ユーザーとして周縁化されてきた人々のモラル・エコノミーという、現状ではほとんど未知の領域をあらためてすくいあげていく実践となるはずであり、そうだとすれば、それはしばしば硬直化することもある情報テクノロジーのデザインのあり方に、様々な新しい視点を付け加えることができるはずである。

注

[1]シルバーストーンらの議論の影響は、カルチュラ

ル・スタディーズの文脈のメディア研究の文脈で顕著だが、特に彼らのドメスティケーション・モデルに依拠した実証的研究として、Lally(2002)、Lie&Sorensen(1996)などを参照。

[2] こうした議論を展開する上では、人間と人工物の対称性を論じるアクター・ネットワーク理論の発想に依拠している。また、同様の論点を家庭という文脈で実証的に論じている論集として、Cockburn&Dilic(1990)が参考になる。

[3]本調査は、財団法人第一住宅建設協会の助成を受けて行われたものである。

[4]主婦という役割と携帯電話の親和性については、本稿と同じ調査の中から、特に主婦の携帯電話利用について論じている土橋(2003)を参照。

[5]このプロジェクトの詳細については、以下のウェブサイトでその内容を参照できる。<http://www.eclipse-jp.com/jeita/index2.html>

参考文献

Ang, I. (1996) 'On the Politics of Empirical Audience Research' in Ang, I. *Living Room Wars*=山口誠訳「経験的オーディエンス研究の政治性について」、吉見俊哉編(2000)『メディア・スタディーズ』、せりか書房、二〇三頁 - 二二三頁

Callon, M. (1987), 'Society in the Making: The Study of Technology as a Tool for Sociological Analysis' In Bijker et.al(eds.) *The Social Construction of Technological System*, The MIT Press

Cockburn, C. & Dilic, R. F. (eds) *Bringing Technology Home-Gender and Technology in a Changing Europe*, Open University Press.

土橋臣吾(2003)「家庭の日常と「主婦」の携帯電話利用」日本認知科学会「教育環境のデザイン」研究分科会研究報告Vol.9No.2、pp.31-40

小林義寛・佐幸信介・土橋臣吾(2002)「情報テクノロジーの受容空間としての家庭」、日本マス・コミュニケーション学会2002年度秋季研究発表会、2002年10月19日於：日本大学

Morley, D. & Silverstone, R. (1990) 'Domestic communication: technologies and meanings', *In Media, Culture and Society*, Vol.12, SAGE

Lally, E. (2002) *At Home With Computers*, Berg

Lie, M. and Sorensen, K. H. (eds.), (1996) *Making Technology Our Own? - Domesticating Technology into Everyday Life*, Scandinavian University Press

Silverstone, R. and Hirsch, E. (eds.), (1992) *Consuming Technologies - Media and Information in Domestic Space*, Routledge

Silverstone, R. (1994) *Television and Everyday Life*, Routledge